



障害をもつ幼児の保育(14)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

目——出会いのときに

私たちはこのシリーズで、障害をもった幼児と出会ったときどうしたらいいのかを考えてきました。子どもの理解しにくい行動に戸惑って、この子たちに失礼なことをしたり、否定的に捉えたりしやすいのですが、この子たちと一緒に生きられるようにとの願いから、まず足で歩くことについて、次に手を使うことを話してきました。さらに今回は目で見ること、見られること、特に初め

て出会うときのことについて考えてみたいと思います。

見ることは距離が必要

M 最近新しく入学した子が私を見ても、そばに近寄らないで、距離を置いて私をじっと見て、それから口を開いて、にこっと笑ったのがとても印象に残っています。それ以上は近寄って来ないで立って見ているのです。

それで思ったのだけれど、今まで考えてきた足で歩くとか、手を使うとかいうことは直接対象に触れての体験だけれど、目で見ることは直接に触れることはしないで、ある距離が必要だということです。

F 保育中に思索していたのですか。それで……。

M その子は私の方をじっと見て、その日はそれ以上は関わりができなかつたけれどそれは自然のことと感しました。すぐには遊んだりしないけれど、きつと私と遊ぶ日がくるといふ予感を感じながら安心して見ていました。

F それは穏やかな出会いですね。

M 目で見るのは空間的距離だけではなく、時間的にも距離が必要で、何回も会っているうちに、私に対しても心を開くときがくる。これがこの日の保育中の思索なんです。

F ああ、なるほど。

見るために空間的に距離が必要なのは当然だけれど、時間的にも必要なんですね。そのことが分かっていると

安心して待つていられますね。

おとなが焦つてこの場になじませようとしたり、必要以上にか何か提示したりするのは、子どもから見ると不自然かもしれませんね。

M そう、距離があるのは当然なんだから、信頼して穏やかに待つ。大人の方が待てなくなるのですよ。

見ること、見られること

F 子どもによつてはとても恥ずかしがり屋で、なかなか新しい所に入れないことがあります。それはどのように考えたらいいのでしょうか。

M それはその子の繊細な感覚からきているのだから、そのまま受け入れて待つ。

F O 君は来始めたころ、部屋の入り口からそつと中をのぞいて誰も人がいないときを見計らつて入ってくるのです。部屋に入つても初めのうちは一人で壁のほうを向いてボールを投げていました。しばらくすると、私とボールで遊ぶようになりましたけれど、あれも距離を

保っていたのでしょね。

そうそう、二階のバルコニーから庭にいるおとなとボールを投げ合う遊びも、私はずいぶんやりました。そんなに距離をおくと大声が出るのです。

M そうだったね、私とはとても元気に一日中大声を出してよく遊びました。「ひんすけひんすけ」(笑い)という言葉が私と関係をつくるときの合言葉だった。おとなから笑顔と肯定的なまなざしを向けられる中で、いきいきとすることが分かりました。

F どうしてそんなに恥ずかしがるのでしょうか。私が考えるのに見ることよりも、見られることに抵抗があるようなんですが……

M 自分が目で相手を見ることは、見られていることを見ることでもある。見ている大人の目に自分がどのような映るかを見るとき、そこに好意を見たり、ときには心配な親の気持ちや、評価する大人の目を敏感に感じるのでしょね。子どもはそのときの大人の心を見ているのでしょ。

F 別の子どもです

が、電車のおもちゃをずうっと目の前で左右に揺らしている子のことも印象に残っています。電車が好きということも

あるでしょうが、それだけではなく相手のまなざしを避けるという意味もあつたかと、いま気付きました。

M そう、そういう子どもは何人もいましたね。鋭い視線は子どもにとって恐怖でしょう。

頭から上着をかぶっていたり、帽子を深くかぶっていたり、よそからの視線を避けていたいのでしょう。

F それだけ繊細な内面を抱えているのだと理解できますね。

目が合わないということ

F 自閉症の子どもは人と目が合わないと言われます



が、このように考えてくるとその理解でいいのだろうか
と思いますかどうでしょう。

M 目が合わないのは、自閉症の症状だと言われることがありますが、一緒に面白く遊んでいると、じきに目を合わせるようになることを私は何度も経験しました。目を合わせることを保育や治療の目標にするのではないんですね。その子は私を見たくないから見ないのでしよう。私を見ると嬉しくなるといのように私自身がなるのにはどうしたらいいかと考えるのが保育者ではありませんか。

F なるほど、そうですね。専門家といわれる人の言うことに子どもを当てはめて見てしまう。自分で子どもに関わって、その子の感じていることを考えることの大切さをおもいます。

以前、新しく参加した実習生が、とても恥ずかしがり屋の男の子がなかなか部屋に入れないでいたら、大きな声で「おはよう」っていつてのぞき込んだのです。もちろん男の子を励まそうとしたのですが、背の高い男性の

実習生が立ったまま見下ろすように覗き込んだので子どもは驚いて、ほとんど恐怖の表情になりました。私があるとき「この子どもたちは繊細で、とても恥ずかしがり屋だから初めての人が、大きな声で声をかけたり近寄りたりすると、おびえる子もいる」と話しました。すると「僕もそうだったからよく分かります。」といつて分かってくれました。自分の子ども時代のことを忘れないで、そのことと重ねて理解することは、おとなが子どもと関わるときに大切なことですね。

でもまた、「この保育にはガイドラインがありますか」と聞く人もいます。子どもを理解することにはガイドラインは必要でしょうか。

M そう尋ねられれば、私はすぐにガイドラインはありませんと答えます。その子とそのときにかかわっているのは自分なので、自分で一生懸命に考えてかかわるほかないでしょう。けれども、こんな場合もある、あんな場合もあるといろんな場合を知っておくと、自分が考えるのにヒントになることはあるでしょう。それを参

考にして自分の場合に於てはめて考えると思わぬ発見をすることもあります。

F 私も実は失敗をしたことがあるのです。

O 君とのことなのですが、なかなか人の体に触れることのなかったO君が私と仲良くなつて初めておんぶをしました。そんなこともあつて私はO君に好かれているという自信のようなものをもっていました。降園するとき泥んこの服を着替えさせると大声を上げるのですが、私はふざけつこのようにしてくすぐったり笑つたりしながらやつていました。そんなやり方がほかの人との間でもやられるようになったとき、離れたところからふと見ると、O君の表情は笑っていないのです。大声も悲鳴のようには聞こえませんでした。

もし私が自分より力の強い人から裸にされて服を着替えさせられたら、どんなにいやだろうと気がつきました。私はとんでもない間違いをしたのではないかと胸が痛くなりました。特別恥ずかしがり屋のO君が裸を見られることにどんな思いだったか。すぐにそのやり方はや

めました。

M そうですね。大人

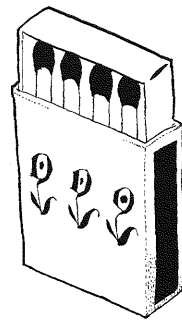
はなにげなく見ているも、見られる子どもには大きな力を加えていることはよくあることです。写真撮ろうと

すると机の下に潜ってしまう子もいます。もちろん写真を撮られるのを喜ぶ子もいますが、撮る人も撮られる人も、皆が友好的な雰囲気の場合です。場合によっては写真撮ることは銃口を向けるのと同じ意味をもつこともあります。「見る」ことの二面性ですね。

F なるほどね。思い当たることがあります。

「見る・見られること」についてもう一度

M 見ること、見られることを考えると、能動と受動一般について考えさせられます。触られることに敏感な子、話しかけられることに敏感な子、命令されることに



敏感な子など、「られる」ことに敏感な人がいますね。さつきあなたが話した〇くんですが、〇くんが初めて来たときは私も覚えていますが、パンツを履き替えさせようとすると、大声で泣きわめいて、知らない人が見たら虐待しているのではないかと思われるほどでした。これは身体に触れることに格別に敏感な子だと私たちはすぐに気が付いて、無理して着替えをしないようにした。人からは「しつけ」をしないんですかと言われたけれど、それよりもっと大事なことがあると私は考えた。母親もそれに共感してくれて、そのあと私共はお互いに楽しく過ごすことをモットーにして、気持ちのよい関係をつくることができました。そのときから二十年たちました。先日も同窓会に来たとき、彼は皆が集まっているところにすぐには入らないで、むかし自分が遊んだ部屋で長い時間過ごしていました。母親が言うには、いつも同窓会ときには何週間も前から楽しみにしていて、作業所の先生たちに、こんな楽しみをもっていて幸せだと言われるとのことでした。彼はどこにいつ

てもジェントルマンだという定評があるそうです。

「障害児保育」というと、何か特別の保育の仕方があるかのように聞こえますが、普通の保育と同じだと私共は考えています。敏感な部分はひとりひとり違いますから、ひとりひとりについてそれを発見して、それにふさわしく保育するのです。それはどの子どもについても同じです。「障害児」という実体があるわけではありません。そこで私共は「障害をもつ子ども」と言います。どこまでも、「子ども」であることは同じだということ強調したいと思います。今日を一緒に快く過ごすこと。そうすると、その子は自分からその先を開いてゆきます。それが保育の根拠だと私共は考えます。

F そうですね。この子を理解するには、愛による想像力が必要なのです。